2019年 春号

僧　伽

第105号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL（076）241－5219
題字　本多　千翠

浄土は西岸にあれども、浄土の門は東岸にある。

（曽我量深『歎異抄聴記』）

曽我量深は、昭和十七年夏に歎異抄について本山で講義をした。『歎異抄聴記』はその講義録である。

レディ・ジェーン・グレイの処刑

常徳寺　西山　彰

目隠しをされた中央の女性は、十六歳の元イングランド女王ジェーン・グレイである。今まさに司祭に導かれ、首置き台の位置を確かめようとしている。その指には真新しい結婚指輪が光っている。画面右側では、死刑執行人の切れ味の悪そうな斧が不気味に光っている。

ポール・ドラーシュ
「レディ・ジェーン・グレイの処刑」（1833年）

絵はイングランドで実際に起こった出来事を、ポール・ドラーシュという画家が再現したものである。夏目漱石は、ロンドン留学中にこの作品を観てたいへん感動したそうである。「雪のごとく白い服を着けて、肩にあまる金色の髪を時々雲のようにゆらす」と漱石は描写している。

十六世紀の宗教改革によって、キリスト教は、旧教（カトリック）、新教（プロテスタント）に分裂した。それはイングランドにおいては、血で血を洗う抗争の幕開けでもあった。

敬虔なプロテスタント信者であったがゆえに、たった九日しか王座に就くことができなかった悲劇の王女ジェーン・グレイ。政治的に利用されたあげく、国家反逆罪の罪を着せられ処刑されることとなった。

勢いに乗るカトリック側は、ジェーンをはじめとするプロテスタント勢力を、子供に至るまで皆殺しにした。それを指示したのが、新女王メアリー一世だった。その残虐な王女の名は「ブラッディ・マリー（血まみれメアリー）」というカクテルの名となって今も語り継がれている。

この悲劇は、宗教上の対立というよりも、宗教が政治利用されただけだという見方もある。いずれにせよ、ヨーロッパにおける宗教がらみの事件の残虐さは、仏教徒の多い日本の比ではない。

（六面に関連記事）

遠山和大

「人は死んだら火葬場に行く」

どんな人間にも例外なく、死は平等に訪れます。死はこの世界の中で生きることの中断なので、その死に対する考え方や捉え方は、人によってさまざまな形を取りつつも、心の底のどこかで、逃れることのできないものとしていつも目を光らせているように思います。それは、恐怖であったり、あえて考えないように目を背ける対象であったり、場合によってはある種の憧れであったりするかも知れません。

人は死んだらどこへ行くのか？　どうなってしまうのか？　という問いに答えを与えることは簡単ではないのですが、しかし、少なくとも日本では、肉体としての人間が死亡したのち、遺体の九九．九％は火葬されています。つまり、肉体という点に関していえば、人は死んだら火葬場に行くのです。

とはいえ、死んでしまった人の側から生者の世界がどのように見えているのか、生者が知ることは不可能なので、死者を送るための儀式である葬儀や、その一環として行われる火葬は、生者たちが自分たちの都合で死者と向き合う（あるいは、死者を「送る」）ためのものということになります。

火葬場では、遺体を焼いて骨の状態にするので、火葬場は、生者が死者の肉体を「現世」のすがたかたちとして最後に見ることができる場所ということになります。そして、火葬場では単に遺体を焼却するだけでなく、それに伴ってさまざまな儀式が行われることになります。日本の火葬場での儀式は、多くの場合、火葬場に到着した遺体との最後の告別を行ったのち、火葬炉へと柩を送り、火葬後に遺族らの手によって遺骨を拾い集めるという流れです。

しかし、そうした火葬場での儀式の内容は、日本国内であっても、地域や宗教・宗派によってさまざまです。一例を挙げるならば、西日本と東日本では（北陸地方ならば富山県と石川県あたりを境にして）、火葬後の遺骨の拾い方に違いが見られ、西日本ではごく一部の遺骨だけを集め、東日本では全ての遺骨を集めるという具合です。

さらに、世界の火葬場を見てみると、地域や宗教によって儀式や遺体・遺骨の扱いに大きな違いがあります。例えば、キリスト教文化圏である欧米では、遺体や遺骨に対する執着心が日本とくらべて少ないようで、遺族が柩を火葬炉に納めるのを見送ったり、遺骨を拾い集めたりすることは、ほとんどありません。

東日本の人たちから見れば、「なぜ西日本では一部しか遺骨を拾わなくても納得できるのだろうか？」ということになるでしょうし、日本人から見れば、「なぜ欧米では火葬炉に入る柩を見送らなくても納得できるのか？」ということになるでしょう。

こうした火葬場での習俗には、その地方の文化的・宗教的な背景、さらには死生観といったものが反映しているのですが、「そもそも、どんな違いがあるのか？」「その違いはどこに原因があるのか？」という点に、私は関心を持ちました。しかし、誰もがいつか必ずお世話になるだろう火葬場についての研究は、他の分野にくらべ、あまり行われていないというのが現状です。こうしたことから、私は各地の火葬場を調査研究してみたいと考えるようになったのでした。

火葬場の研究をしているという話をすると、「どうしてそんな研究を始めたのですか？」とよく訊かれます。現在の日本では、高齢化に伴って死者数が増加するという「多死社会」が到来しており、人の「死」に対する関心が高まっているようです。さらに、十年から十数年後という近い将来には火葬場の数も足りなくなると予想されています。こうした社会的背景から火葬場に対する関

心が高まっているというのは、表向きの理由としてはもっともらしいのですが、その一方で、最初に書いたような、人の死に対する逃れることのできないような興味関心が、火葬場の研究へと私を駆り立てるのだと思っております。

【自己紹介】
とおやま　かずひろ
一九七四年、東京赤羽生まれ。二〇〇五年、富山大学大学院理工学研究科中退。富山大学では雪氷学を専攻し、北アルプス山岳地の雪に含まれる化学成分の分析から、アジア大陸からの越境汚染について研究を行ってきた。二〇〇九年、岡山大学学務部助教。このあたりから道をあやまりはじめ（？）、正信偈のオンライン学習サイトを作ったり、火葬場の研究にも着手したりする。二〇一六年、富山大学総合情報基盤センター講師。現在は富山大学生の情報教育に関する仕事をしつつ、これまでに手がけてきた研究も引き続き行っている。

絵本の紹介

『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』

くさばよしみ 著
中川学 絵
汐文社

ホセ・ムヒカという人物をご存知ですか。二〇一〇年から二〇一四年まで、南アメリカのウルグアイという国で大統領を務めた方です。大統領在任中の二〇一二年にブラジルで行われた国連会議でのスピーチが、世界中で注目され、大統領退任後日本にも来られたので覚えていらっしゃる方もおいでだと思います。この絵本はそのスピーチを絵本にしたものです。

ウルグアイはヨーロッパからの移民によって建国されました。ムヒカさんの父はスペイン、母はイタリアからの移民です。大西洋に面し、ほとんど山のないこの国は農業に適していたため、南米のスイスと呼ばれるほどに豊かな国になりました。しかし貧富の差が開き始めると政権は強権的になり、ムヒカさんは反政府活動をするようになります。軍事政権の頃には六発もの銃弾を撃ち込まれ生死のはざまをさまよいました。計四度も投獄されますが、釈放された後、選挙で大統領に選ばれます。

十三年間に及ぶ獄中生活の間、読書の日々を送ったムヒカさんは、僅かなものでも幸せを感じることができることを学びました。そして正義の名のもとにいかに多くの残酷な行為が世界中で切り広げられてきたのかを知りました。そこで、それまで持っていた政治的なイデオロギーを捨てて、特定の宗教や政治思想にしばられない政府を目指したのです。

また、大統領になったムヒカさんは、現代の大量生産・大量消費社会に疑問を持ちます。大量消費することが幸せだと思い、そのために寝る間を惜しんで勉強し働くことが本当に幸せなのだろうかと。自分のための時間をたっぷり持つことの方が幸せなのではないかと。南米の先住民の「貧乏とは、無限に多くを必要とし、もっと欲しがることである」ということわざにも共感しました。

しかし、かれの願うような社会を実現することの難しさも十分に理解していました。そのうえで、集団生活をせざるを得ない人間社会では、たがいの多様性を認めながらも「共有する理想」が必要であると説いたのです。人と人とが関わり合うということは「互いの理想を抱き合うこと」であると信じ、たとえ困難な道のりであっても「もう少し」と歩みを続けることの大切さを訴えています。

そのムヒカさんのスピーチを絵本で読んでみませんか。子供はもちろん大人の心にもその言葉が響いてくるはずです。また、この絵本の編集者であるくさばよしみさんがムヒカさんとのインタビューを本にした「世界でいちばん貧しい大統領からきみへ」（汐文社）も出版されています。興味のある方はこちらもぜひ読んでみて下さい。（淨）

和讃（わさん）に学ぶ　第五十七回

徳法寺　杉谷　淨

「仏教」の変遷

「仏教」には二つの意味があるとされています。それは「仏によって説かれた教え」と「仏になるための教え」です。

「仏」とは「目ざめた人」を意味する「ブッダ」に漢字を当てはめたものです。お釈迦様の時代「仏」という言葉は広く使われている言葉でした。つまり、お釈迦様以外にも「仏」と呼ばれる方は沢山いらしゃったのです。更に、お釈迦さまの弟子の中で、お釈迦さまと同じ悟りに達していらっしゃった方も、同じく「仏」と呼ばれていました。ですから「仏によって説かれた教え」の「仏」はお釈迦様だけではなかったのです。実際、お釈迦様のお弟子方の言葉も「仏教」として受け止められていました。このことは文字通り「仏になるための教え」であったということです。

お釈迦様が亡くなられると、次第にお釈迦様は特別な存在となり、お釈迦さまの弟子たちは「仏」とは見なされなくなりました。仏教以外で「仏」という言葉も使われなくなり「仏」は「お釈迦様」と同じ意味になります。「この世でどれだけ修行しても、お釈迦様のように成ることはできない」とされ、さらに「この世界の仏はお釈迦様だけである」という「一つの世界には一人の仏」という決まりができます。これによって「仏によって説かれた教え」は「お釈迦さまによって説かれた教え」という意味になり、もう一方の「仏になるための教え」の方は曖昧なものになりました。

大乗仏教になると、お釈迦様の他に「この世界以外の仏」が登場します。「異世界の仏」である「阿弥陀仏」や「未来世界の仏」である「弥勒仏」などで、これらの「仏」の教えも「仏教」となります。そして、命が尽きた後にその仏の世界に生まれかわって、そこで「仏になるための修行」をするということが目標となります。

この現実性を失ってしまった「仏教」に反発する形で、禅宗や真言宗のように、この世で仏になることを説く宗派が生まれてきました。

では親鸞聖人の「仏教」はどうでしょう。

阿弥陀如来
来化してこそ
本師源空としめしけれ
化縁すでにつきぬれば
浄土にかへり
たまひにき

親鸞聖人は「仏」を、法そのものである「法身」教えという言葉である「報身」人として姿を表した「応化身」とに分けます。この和讃は師の法然聖人を阿弥陀仏の「応化身」として讃嘆しているものです。つまり、親鸞聖人にとっての「阿弥陀仏」は「この世で自分を教え導いてくれる仏」になります。浄土から私を導いてくださるためにこの世に現われた仏であることから「阿弥陀仏の還相」といいます。

信心よろこぶ
そのひとを
如来とひとしと
ときたまふ
大信心は仏性なり
仏性すなわち如来なり

ここにある「大信心」とは「如来からたまわりたる信心」ともいわれる「私の中で信心となってくださる阿弥陀仏のはたらき」です。これを「阿弥陀仏の往相」ともいいます。「還相」としての阿弥陀仏に、私の中で呼応してくださる信心としての阿弥陀仏です。親鸞聖人にとっての「仏によって説かれた教え」の「仏」はお釈迦様を含め「阿弥陀仏の還相」として導いてくださる「無数の仏」です。「仏になるための教え」という意味もありますが、親鸞聖人の言葉の中に「仏になる」という強い思いは感じられません。それよりは「信心を得る」ことを重視しています。その信心とは次の様なものです。

無碍光仏のひかりには
無数の阿弥陀
ましまして
化仏おのおの
ことごとく
真実信心をまもるなり

「無碍光仏」は阿弥陀仏の別名です。「ひかり」は智慧ですから、阿弥陀仏の智慧によって、私の周りの人々が、信心を守ってくれる無数の阿弥陀仏として見えてくるのです。ですから「仏教」は「仏を見る（観ずる）ことができる教え」です。

このように「仏教」の意味も時代や宗派によって変化しているのです。

本の紹介（一）

『往生と成仏』に見られる曽我教学の晩年（2）

前回に引き続き、次の三つの語をキーワードにして進めていきたい。

①住正定聚…往生が正しく定まり必ずさとりをひらくことができる人々のことを正定聚という。住正定聚とはその位に付くこと。

②往生…浄土に生まれること。つまり覚りを開くのに最もふさわしい場に生まれ変わること。

③成仏…覚りを開き仏になること

曽我量深氏は現益（生きている間の利益）に**②往生**を、当益（死後の利益）に**③成仏**を当てはめ、往生は生きている間のことであると了解したことは前回述べた。

それに対し、意外にも金子大栄氏はこの考えに同意していない。同じ本の中で、現益に**①住正定聚**を、当益に**②往生**を当てはめておられるのである。生きている間に往生を約束された者が、死後浄土に生まれるのであると理解されている。これは従来の保守的な解釈である。そうすると、必然的に**②往生**と**③成仏**の厳密な区別は必要なくなってくる。

だから、極端に申しますと、これは私のひそかなこころですが、往生さえさせて頂けば、成仏はどうでもよいといってよい。往生さえすれば成仏しますからというのが私のいつわらない心であります。これは私だけの気持ちではなく、教行信証はそうなっているのではないでしょうか。

（金子『往生と成仏』）

この両氏の見解の違いは決定的である。曽我氏にしてみれば、金子氏の主張をどうしても受け入れられない理由があった。氏にしてみれば、**②往生**と**③成仏**の濃密な連続性こそが重要だったのである。それはとても**①住正定聚**と**③往生**の関係が取って代われるようなものではなかった。氏にすれば**③往生**はどこまでも往生であり、**①住正定聚**などという軽い言葉では言い表せないものだったに違いない。

信の一念に往生は定まるということは、往生を予約したということではありません。往生はいつするか。往生を今するんなら一益法門でないかという。しかし往生しても一益法門ではありません。成仏したら一益法門、そうでありましょう。

（曽我『往生と成仏』）

お二人の言葉から、昭和四十年代の大谷派の旧態然とした体質をうかがい知ることができる。死後の利益である「当益」のみが強調される一益法門が幅を利かせていたのであろう。お二人はこのことを危惧されて、それぞれの方法で真宗本来の教えを取り戻そうとされたのである。この点では、お二人の足並みは完全に一致していたと言える。

しかしこのような枠組みでの議論を、近年の真宗学の中に私はほとんど見たことがない。そのことは、曽我氏の後継者たちによって、近代教学はすでに「現代教学」という新たなステージに押し上げられたことを意味するのであろうか。今の私にはその判断はつかないが、曽我氏の言葉をもって拙稿を締めくくることとしたい。

往生という言葉には種々の使い方があることと思うのでございますが、こういうことはやはり真宗教学が完成していないからそうなる。だから今日の我々は、今まで教学は完成しておらんのでありますからして、完全にするようにみんなが手をとりあって努力してゆくべき時期に到達したと私は思う。…それをしなければ真宗は滅亡します。

（曽我『往生と成仏』）

曽我氏のこの思いを、現代の私たちは十分受け止めていると言えるのだろうか。

（彰）

徳法寺のホームページのご案内

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは http://tokuhou-ji.com/ です。是非覗いてみてください。

本の紹介（二）

日本の仏教

渡辺照宏 著
岩波新書

表紙の文章を書き終えた後、思うところがあって、本棚から渡辺照宏著『日本の仏教』を取り出した。

この本の中で、渡辺氏は次のように述べている。

「一神教などの宗教では自分の教理と異なるものを異端とか邪教とか言って忌み嫌う傾向がある。しかし仏教は特殊の教理を人に押しつけるものではなく、…たとえ異なった見解や信仰形態を持っていても一概に排撃することはしない。」

確かに、仏教はその発生時において既に、以前からあったインドの土着の神々を否定することはしなかった。それどころか、仏陀を守護する役割を与えたのだ。梵天や帝釈天など十二天と呼ばれる仏教の守護神は、仏教流布以前の古代インド神話やバラモン教の神々だったことはよく知られている。

そのような特質は、日本に伝わってからも変わらなかった。仏教は外来宗教であるにもかかわらず、日本古来の神々とも融合し、見事に日本社会に溶け込んだ。また明治期にキリスト教が伝わったときも、さほど激しい宗教論争も起こらなかった。

表紙に紹介したような血なまぐさい悲劇が日本で少ないのは、この仏教本来の「寛容さ」によることは間違いなさそうである。

しかしその美徳を単なる自画自賛に終わらせないところが、渡辺照宏という仏教学者の一流たるゆえんであろう。氏はこうも述べている。

「慈悲と寛容はもちろん宗教として理想的な態度には違いないが、場合によっては弊害も伴った。卑俗な信仰形態を忍容することによって仏教本来の姿が見失われる場合さえも出てきた。」

仏教は、中国、日本と伝来していく過程で土着の風習や思想を受容し、様々な変化を遂げた。この書を読むと、私たちが「仏教的」だと思っていることのほとんどが、本来仏教とは関係のないところにその起源をもっていることがよく分かる。詳しい言及は避けるが、現在仏教が抱える問題の多くは、この寛容さによるところが大きい。

興味のある方は、ぜひこの本を手に取られることをお勧めしたい。しかし、氏は浄土真宗に対して批判的な立場を取っておられることも知っておかねばならない。氏の理想とする仏教者は、法然や親鸞ではなく、禅宗の道元なのである。そのことも踏まえて、氏の辛口の意見に耳を傾けるのもまた一興であろう。

（彰）

各寺のご案内

◆常徳寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎報恩講

五月十九日（日）
午前九時半より
正信偈のお勤め
午前十時半
法話
幸圓寺住職
幸村　明師
正午
御斎　手打ちそば
更科　藤井
午後一時
講演会
イラストレーター
中川　学氏
午後二時半
中川　学氏と
住職のトーク

◆徳法寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日
午後七時半より
講師　杉谷　淨

四月
第三章　仏教の変遷二
「原始教義の形成」
五月
第三章　仏教の変遷三
「部派仏教時代」
六月
第三章　仏教の変遷四
「大乗仏教の予兆」
七月
第三章　仏教の変遷五
「大乗仏教興隆」

編集委員

今号を持ちまして僧伽の最終号とさせていただきます。長い間ご愛読いただきましたこと、誠にありがとうございました。

西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）